



# Oasis meets Books

オアシス・ミーツ・ブックス

本のあるオアシス 本のある人生

2021年10月vol.15

秋の夜長、いかがお過ごしでしょうか。

私は最近、渋沢栄一氏の著書「論語と算盤」という本が気に入っています。

タイトルは「人格形成と利益追求」と言い換えることもできます。

この本を読み、ふたつの言葉の間にある「と」の意味を深く考えたことから、これからの自分がどのように行動すれば良いかのヒントを得る事ができました。

皆さんも良い本と巡り合えますように。 (教育委員会 委員長：前田 吉紀)

## 失敗図鑑 / 大野 正人

### 特養オアシス寿安 生活支援課 / 介護士 織田 雄貴

私が紹介させていただく書籍は「失敗図鑑～すごい人ほどダメだった～」です。この本にはライト兄弟や野口英世、ベートーヴェンといった歴史に名を残す偉人たちの

「失敗談」がたくさん出てきます。中でも野球の神様ことベーブ・ルースの話が印象に残ったので紹介いたします。

彼は7歳から19歳までを更生施設で過ごすほどの問題児、いわゆる不良少年でした。しかし更生施設でマシヤス神父と出会い、神父からたくさんの愛情を与えられ、野球を教えてもらったことで、野球選手への道を進むようになります。愛情と更生するきっかけを授けてくれたマシヤス神父との出会いは、ベーブ・ルースにとって非常に良い出会いだったと思います。

誰もが名前を聞いたことがある偉人たちにも多くの失敗があり、その失敗を成功への糧にしてきたことを知って、努力や挑戦することの大切さに気付かされました。読めばきっと前向きになれる、そんな著書ですので是非一読いただきたいと思います。



・次回⇒特養オアシス寿安 生活支援課 / 介護士 向井 三千代

## 現代家族 / 黒岩 重吾

### グループホーム オアシスキズリ / 介護士 斎藤 正人

昭和50年代後半:東京のある家族の物語です。

高校教師をしている両親、十代の一人娘、祖母の4人家族で暮らしていく中で少しずつひび割れてゆく家族関係、ほころびてゆく絆……。

父であり教師でもある勇作は、家庭の不和に心を痛めていたある日、生徒の関係者から腹部を刺され重傷を負います。重い事件ではありますが、その生徒との関わりの描写の端々に、問題を抱える若者に寄せる、著者の温かい心を感じることができます。

また、その事件を機に、今にも散り散りになりそうだった家族の関係が少しずつ変わっていきます。一家の担い手が、家族をまとめて平凡かつ平穩な“普通”の生活を営むことがどれだけ大変か。その難しさを感じつつも、崩壊寸前だった家族一人一人が立ち直っていき、あきらめず前向きに生きていく様は感動的であるとともに、とても考えさせられました。

家族とのかかわり、普通である事のありがたさ、とても身近なストーリーです。是非読んでみて下さい。



・次回⇒グループホーム オアシスキズリ / 介護士 佐山 正憲

## 孤宿の人 / 宮部 みゆき

### デイケア オアシス寿安 / 介護士 大西 由美

宮部みゆきさんの作品の中で、私の一押し時代ミステリーです。

主人公は九才の孤児の少女“ほう”。虐げられて野良猫のように育った“ほう”の名前は、阿呆の“呆”から付けられました。奉公先の江戸から連れ出され、讃岐国に置き去りにされますが、この土地で“ほう”が巡り合った人たちは、真面目で働き者の“ほう”に寄り添い、慈しみます。しかし、“ほう”に人の温かみを初めて教えてくれた女性、琴江が毒殺されるという出来事から物語は動き出します。

幽閉され、頑なに心を閉ざした幕府の要人、加賀様。“ほう”は、読み書きを習いながらその心を開いていきます。

そして最後には、宝の“ほう”と名付けられるまでになります。この物語の町に住む人たちは皆、もがきながらも懸命に生き、その姿に心を動かされます。

感動のラストは、涙です。ぜひ読んでみて下さい。



・次回⇒デイケア オアシス寿安 / 介護士 野原 由美

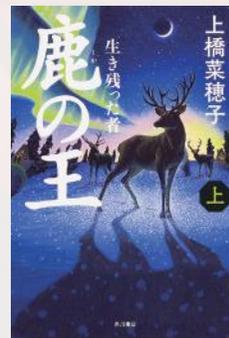
## 鹿の王 / 上橋 菜穂子

### グループホーム オアシス平野 / 介護士 中山 英代

2015年の第12回本屋大賞及び第四回日本医療小説大賞を受賞した「鹿の王」をご紹介します。謎の疫病が浸食する世界でただ二人、抗体を持つ孤独な戦士と

彼が拾った幼子、そしてその病の謎を追う天才医師の両側から話が展開される、生命を巡る壮大なファンタジー冒険小説です。この世界を支配する国と支配される人々という政治的な側面も同時に描かれ、繊細で現実味のある世界観はファンタジー作品であるのに不思議と親近感を覚えます。

物語を通して、「人はなぜ病み、なぜ治る者と治らない者がいるのか」といった生命の謎と尊さについて考えさせられる作品ですので、一度手に取って「鹿の王」の世界に入り込んでみてはいかがでしょうか。きっと新しい発見と感動に出会えると思います。



・次回⇒グループホーム オアシス平野 / 介護士 松永 憲子

## ミライの武器 / 吉藤オリイ

管理本部 人材開発部 / 大村 理加



「これからの時代、息子たちが将来や進路に悩んだ時に、どんなアドバイスや寄り添い方をしてあげられるのだろうか？」



育児書は全く読みませんが、児童～学生向けの本をたまに読んでヒントを探しています。そういった背景もあり、ご紹介する「ミライの武器」は中学生・高校生向けの本ですが、大人が読んでも満足できる作品です。

著者である藤吉オリイさんは、小学校5年生から中学2年生まで不登校。

自己肯定感ゼロの少年が人との出会いによって自分が夢中になれるものを見つけ、それを柱に試行錯誤し、素晴らしい人生を手に入れた経験を語られています。

各章が2～3ページ程度の構成であったり、マーカーが引かれてあったりと本を読むのが苦手な方でも読みやすくなっています。

また、著者は分身ロボット「OriHime」の開発者で、介護・福祉業界からも注目されている方なので、是非、その世界観を覗いてみてください。

・次回⇒管理本部 人材開発部 / 課長 北田 晋也

## 幸福な食卓 / 瀬尾まいこ

老健 栄養科 / 管理栄養士 矢野 萌



「父さんは今日で父さんを辞めようと思う」物語はこの言葉から始まります。一度自殺未遂をした父、夫の引き起こした騒動をきっかけに家を出た母、天才児であったが大学を中退し農業団体に働く兄、そして主人公、中学三年生の佐和子。

幸せな家族の物語と思いきや、それぞれ悩みを抱えており、苦しんで悲しんで、それでも家族で支え合い、困難を乗り越えて前へ進んでいく物語です。

話の途中で、「家族は作るのは大変だけどめったになくならない。そう簡単に切れたりしないのだから安心して甘えなさい。」という言葉がありました。家族とは何でも言いあえる間柄、ケンカをしても翌朝には誰もが元通りになり「おはよう」と挨拶をします。

友達だと、いつまでも根に持ったり引きずったりして中々仲直りが出来ません。最後は、佐和子が辛くて悲しくて前を向いて生きていく姿にホロッと涙がこぼれました。家族の前では弱音を吐いてもいい。何でも受け止めてくれるから。「やっぱり家族っていいな」と思える物語です。

友達が、いつまでも根に持ったり引きずったりして中々仲直りが出来ません。最後は、佐和子が辛くて悲しくて前を向いて生きていく姿にホロッと涙がこぼれました。家族の前では弱音を吐いてもいい。何でも受け止めてくれるから。「やっぱり家族っていいな」と思える物語です。

「やっぱり家族っていいな」と思える物語です。

・次回⇒老健 オアシス / 配食事務 松川 信子



## 明日の記憶 / 萩原 浩

老健 オアシス デイケア・ロング / 介護士 安田 知子



私は介護職についた頃、この物語を映画で見ました。記憶が失われることがどれだけ不安なことかを知り、その時感じた事が私の認知症の方と接する際の基礎のようなものになりました。



十数年この仕事をやってきて、利用者様に認知症の方が増えたように感じます。なかなか思うように仕事を進めることができないことから、イライラすることも増えたように思います。そこでもう一度、原点に戻るべく、この作品の原作を読んでみようと思いました。

物語ですが、広告代理店で部長を務める主人公が50歳で若年性のアルツハイマー症を発症します。初めは受け入れられず、混乱し否定します。しかし受容しようと努力し、薄れていく今までの記憶を大切にしようとする姿が描かれています。主人公の目線で心の中を描写しているため、心がどのように動いていくのがよくわかりました。自分が同じような年齢になった今、以前のように他人事として読まず、自分自身も不安にもなりました。

原作を読むことで感じたのは病気であるかないか、記憶を失うか失わないかに関わらずに1日1日を大切に過ごしていくべきだということでした。

忙しいと1日、1年があつという間に感じます。そんな風に感じている方にも読んでみていただきたい作品です。

・次回⇒老健 オアシス デイケア・ロング / 介護士 高橋 亜沙子

## オアシス文庫 recommend



田中圭一さんは大学卒業後、玩具メーカーに就職。その後、ゲームメーカー、ソフトウェアメーカー、電子書籍会社を渡り歩き、サラリーマンとの二足の草鞋を履く兼業マンガ家です。

この本は、ご自身の「俺は何もできない駄目人間じゃん」という自己嫌悪が引き金になりうつ病を発症してから、うつ病のトンネルを抜け出した”うつ病脱出体験”をベースに描かれています。

また、同じようにうつ病からの脱出に成功した人々をレポートするドキュメンタリーコミックです。

「うつ病は”心の風邪”なんて生易しいもんじゃない。 ”心の癌”だ。薬では治らない。これ以上は無理してはいけないという身体が発する”非常ベル”だ。」ということが、とても理解しやすく描かれています。うつ病で苦しむ人々を救うための手助けになれば、との思いで描かれたそうです。

心と体のバランスを崩されたり、コロナ禍でストレスを感じている方は読んでみられてはいかがでしょうか。

(教育委員会：内田美子)

老健入り口の書棚「オアシス文庫」から貸し出しできます▶



蔵書ご案内

うつヌケ / 田中 圭一

## 編集後記

実は私は、今号で紹介された「鹿の王」の作者、上橋菜穂子さんの大ファンです。世情柄、安易にお勧めすることはできませんが、本作はアニメーション化され、近々上映が予定されているようです。

作中で主人公ヴァンが「鹿の王」について、「群れを支配する者、という意味ではなく、本当の意味で群れの存続を支える尊むべき者」と話す場面があり、その言葉は今も深く心に残っています。

治世、争い、あらゆる欲、感染症、風習、人の繋がり…ファンタジー作品の括りになりますが、民俗学者でもある著者の描く世界はとて現実味が骨太です。

今号は奇しくも「生き方」に焦点を結んだ作品をたくさんご紹介いただきました。

皆様の「読書の秋」のお供になりましたら幸いです。

oasis  
おかげさまで25周年 Anniversary

教育委員会

(教育委員会：中島美和子)